

湖南省仏教寺院訪問記

鎌田茂雄

南岳衡山を領域内にもつ湖南省の仏教寺院をすべて調査するにはかなりの時間を必要とする。今回は十日余りの日数で禅宗関係の寺院を一わたり見学したに過ぎず、現地調査とは名ばかりの見学旅行であつた。

中国名勝志典叢書の王仲奮編著『中国名寺志典』（中国旅游出版社、一九九一年三月）の湖南省の項には、湖南省の名刹として開福寺、麓山寺、雲門寺、普昭寺、龍興寺、祖師廟、普光寺、夾山寺、密印寺、南岳廟、祝聖寺、方広寺、上封寺、廣濟寺、高台寺、福嚴寺があげられているが、

今日はこれらの代表的な寺院ですら全部を訪問することはできなかつた。

一 長沙市 岳麓山

湖南省長沙市の湘江の西岸にある。昔は衡山（南岳）の足にあたるので岳麓と称したという。南北朝時代の劉宋の時にできた『南岳記』には、「南岳は周囲八百里、回雁を首となし、岳麓を足となす」とあるという。

面積八平方キロ、最高峰は海拔二九七メートルであるが、山は深く谷は幽邃であり削壁がそそりたつていて、西漢以来の多くの遺跡があり、それらの遺跡には、岳麓書院、愛晚亭、麓山寺、望湘亭をはじめとし、唐の李邕の麓山寺碑、宋代の石刻である禹王碑などもある。

愛晚亭

もとは紅葉亭といつたり、愛楓亭とも呼んだ。岳麓書院の背後の清風峽の小さな丘の上にある。まわりはすべて楓の林におおわれ、春には緑、夏には冷しさを呼び、秋には全山紅葉して、四季それぞれの趣きがある。

愛晚亭は清の乾隆五十七年（一七九二）に建てられたものである。唐の杜牧の「停車坐愛楓林晚、霜葉紅于二月花」という詩から愛晚亭という名をとつたといわれる。

亭前の石柱には対聯が刻されており、亭の右には清楓橋がありその下の小さな溪流を蘭澗と呼んでいる。一九五二年にふたたび修理され、欄干、天井が一新し、毛沢東が書いた愛晚亭の額がかかけられたのである。あたりの景色は静寂そのものであり、毛沢東がかつてこのあたりを散歩しながら読書や思索をしたところといわれている。

岳麓書院

岳麓書院は岳麓山の東麓にある。北宋の開宝九年（九七六）、潭州太守朱洞が創建し、天禧二年（一〇一六）、宋の

真宗が「岳麓書院」の門額を下賜したために、宋代の有名

な書院の一つとなつた。南宋の哲学者張栻、朱熹などがここで学び千人余りの学徒が集つたので、当時の人は「蕭湘洙泗」と呼んだといわれる。清の光緒二十九年（一九〇三）、高等学堂という名称に改められ、さらに高等師範と改名され、一九一八年には湖南高等工業専門学校がこの地に移転した。一九二五年、工專、商專、法政專の各校が合併して湖南大学となつた。

千年以来、書院は戦火に見まわれ、たびたび破壊されたり修理されたりしたが、現在の建物は清代に建てられたものである。書院の前亭の左右の壁には、「忠孝廉節」の四大字が石刻されているが、これは朱熹が書いたものである。この字は大きくて見事なものである。また「道南正脈」と書かれた木の扁額は清の乾隆帝から賜つたものである。亭の下の左の廊下に「整齊嚴肅」の四文字の大きな石刻は、清の乾隆時代、御史の衡山歐陽正煥が書いたものである。附属の建築には、文昌閣、御書樓、六君子堂、十彝器堂、濂溪祠、湘水校經堂、赫曦台、自卑亭などがある。

雲麓宮

雲麓宮は岳麓山の頂上にある。道家は洞真虛福地と称し、清の康熙の『岳麓志』には、昔は宮殿があつたが長い間、廃絶されていたと記されている。乾隆年間に五間の殿を構えたが、その後、三清殿を作り、冶鉄で瓦をつくり、石を立てて柱とした。咸豐二年（一八五二）に毀され、同治二年（一八六三）に修復された。三清殿の右には望湘亭があり、そこからは湘江と長沙の市街が目の前にあるようにはつきりと見える。清の詩人の黃道讓が対聯を撰し、

西南の雲氣、衡岳より來る

日夜の江面、洞庭を下る

と記した。

亭の下には拜岳石（飛来石ともいう）があるが、その正方形の石の幅は一丈余りある。その石から衡岳が遠く望まれ拝むことができる所以拜岳石といわれた。門の外の古い樹の中に鐘があり飛鐘と呼ばれている。

麓山寺

山門の対聯には、「漢魏最初名勝、湖湘第一道場」と書かれている。明の神宗の時に万寿寺と改名され、後、兵火にあつたが、清の順治五年（一六四八）に再建され、さらに清の光緒年間（一八七八—一九〇八）に修復された。晋代以来多く名称が変えられたが、民国初年はまた古麓山寺と呼ばれた。もとは大雄宝殿と弥勒殿があつたが民国三十一年（一九四四）、日本軍の爆撃によつて破壊された。現存している寺門、後殿、藏經閣、大門は練瓦で造られている。藏經閣は硬山式の二階の建物で、その前の左右には一株の羅漢松があり、「松闕」と呼ばれているが、この中の株は六朝に植えられ、すでに一千年余りの歴史があるといわれ、他の一株は明代に植えられたものである。

寺の中には玉泉がある。寺の古い樹木にかかえられている泉は石のすき間から流れ出し清冽で甘い水であり、冬にも夏にも涸れることがない。現在でもこの泉が湧いているが、それほどきれいな水ではないが、名勝の玉泉であるた

六八）に建てられたが、始めは法崇禪師のために創られたもので古鹿苑と呼ばれた。北宋の元祐年間に寺に改められたが、長沙でもっとも古い仏寺となつた。

山門の対聯には、「漢魏最初名勝、湖湘第一道場」と書かれている。明の神宗の時に万寿寺と改名され、後、兵火にあつたが、清の順治五年（一六四八）に再建され、さらに清の光緒年間（一八七八—一九〇八）に修復された。晋代以来多く名称が変えられたが、民国初年はまた古麓山寺と呼ばれた。もとは大雄宝殿と弥勒殿があつたが民国三十一年（一九四四）、日本軍の爆撃によつて破壊された。現存している寺門、後殿、藏經閣、大門は練瓦で造られている。藏經閣は硬山式の二階の建物で、その前の左右には一株の羅漢松があり、「松闕」と呼ばれているが、この中の株は六朝に植えられ、すでに一千年余りの歴史があるといわれ、他の一株は明代に植えられたものである。

寺の中には玉泉がある。寺の古い樹木にかかえられている泉は石のすき間から流れ出し清冽で甘い水であり、冬にも夏にも涸れることがない。現在でもこの泉が湧いているが、それほどきれいな水ではないが、名勝の玉泉であるた

めに、人はその井戸をのぞいている。この玉泉は白鶴泉と呼ばれるが、現在ではそのそばに白鶴茶室が開かれている。寺の下の山麓には「麓山寺碑」がある。この碑文は晋から唐までの麓山寺の盛況の歴史を述べたものである。この

碑は唐の有名な書道家である李邕が、開元十八年（七二〇）に撰文並びに撰書したものである。李邕がかつて北海太守に任せられたことにより、この碑は「北海碑」とも呼ばれている。この碑文は李邕が書いた作品の中の逸品であるといわれる。これは書道芸術の研究にとつて重要な価値があるといわれる。

歴代の有名人は麓山寺に留つて少なからず詩を詠んだ。その中には唐代の杜甫の「岳麓、道林二寺」がある。その漢詩はつぎの如くである。

玉泉之南麓山殊
道林林壑爭盤行
寺門高開洞延野
殿脚插入赤沙湖

現在、寺院南には新しく芸叢園が開かれ、盆栽が植えられている。蘭園には蘭が植えられその香りがただよつてい

る。北側にある芳境園には百花競いあつて咲き乱れ、花蹊園には花がその美しさを競つていて。一年を通して観光客が絶えることがないといわれる。

開福寺

開福寺は長沙市北にある新河口の鳳嘴の南にある。旧城の湘春門から約一キロの距離である。五代の時、楚王馬殷のために建てられた寺である。北宋の嘉祐年間（一〇五六—一〇六三）、寺僧の紫珂が屋根を葺いた。明の吉簡王がつづいて重修した。明末に兵火で破壊された。清の順治十七年（一六六〇）、寺僧仏国が主となつて再建した。乾隆三十七年（一七七二）、嘉慶元年（一七九六）の二回にわたる火災によつて廊屋が焼けたが、光緒十三年（一八七八）に再建された。民国十一年（一九二二）寺僧の宝生が前殿と中殿の木柱を花崗岩の石柱に変えた。主要建築には山門、三聖殿、大雄宝殿、毘盧殿などがある。山門は四柱三門三樓からなり花崗岩でできた牌樓式の建築である。中門の上方の横額には「古開福寺」と題され、二つの聯には「紫微栖風、碧浪潛龍」と書かれている。それは清の嘉慶

十一年（一八〇六）に韓崶が書いたものである。牌樓の上には多くの泥塑の人形があり、門の前には石の獅子と石の象が一対ある。

三聖殿の幅は三間、外檐の柱は正方形で、内檐は円柱で、同じく花崗岩を彫つてできたものである。梁は木でできており、单檐の歇山式の屋根があり、屋根には琉璃瓦が葺かれている。もとは「功德山高」と書かれた扁額があり、その中には西方三聖仏が祀つてあつたが今はない。

中殿は大雄宝殿であり、その中には釈迦牟尼像が祀られている。その幅は三間あり、周りには回廊が配され、石柱と木梁が造られている。外檐は方柱で内檐は円柱、单檐、歇山式の屋根で、その上は琉璃瓦で葺かれ、屋根のへりには竜と鳳凰の塑像が天に向つて造られている。

後殿は毘盧殿であるが、中には毘盧遮那仏像があり、煉瓦と木で造られている。この毘盧殿の左右の聯には「理涵事事具理行布不礙圓融」「因該果果徹因發心使成正覺」と書かれ華嚴学の言葉が見られた。幅は約三間、前廊は磚拱をもつて左右の堂舎に連つている。

三殿の東側にあるのが斎堂、客堂、紫微堂であり、多く

は二階建であり、天井には花や木が植えられている。

三殿の西側には、平屋建の禪堂、説法堂がある。西廂の側房には火災を封じるための硬山式の「馬頭牆」があり、青瓦で葺かれている。西廂の外には碧湖詩社の遺址がある。碧湖詩社は清の光緒十二年（一八八二）、王先謙などと海印和尚が建てたものである。

寺内にはまた清の康熙、光緒年間の石刻碑がある。寺の境内には、古樟（くすのき）や芭蕉があり幽邃な趣があり、寺の周囲の風景もよい。

古来から文人や知名士がこの地を訪れ詩を詠んだといふ。明代には李冕が「開福寺詩」をつぎのように詠んだ。

最愛招提景

天然入雲屏
水光含鏡碧
山色擁螺青
抱子猿歸洞
冲雲鶴下訂
從容坐來久
花落滿間亭

二 寧鄉県

中国、湖南省の省都である長沙市の賓館を出発すると、すぐに洞庭湖にそそぐ大河湘江を渡り、左に岳麓山を見ながら田園地帯を西へ進むと寧鄉県に入り、湘江に流れこむ鴻水にかかる鴻江橋を渡ると寧鄉県城に着く。さらに左折して黄材水庫のある黄材鎮を過ぎると山岳地帯に入る。うねうねと曲がりながら山を越え谷を渡り、小さな村落をいくつか通り過ぎると視界が一瞬開けてきた。鴻山郷へ着いたのである。山間の盆地に密印寺の山門がそびえ立つているのが見える。村の市場を通りすぎたところにあるのが、

密印寺である。

密印寺は大鴻山毘盧峰の南麓にある。大鴻山は海拔九二七・四メートルの山で、鴻水の水源地である。山門には「十方密印寺」の題額があり、左右の門聯には「法雨來衡岳」と「宗風啓仰山」と書かれていた。山門の中央には「般若道場」の扁額があざやかである。この密印寺が湖南省の文物保護単位であることを示す一九九〇年十月に立てられた看板も見える。

山門を入ると正面にそびえ立つのが大雄宝殿である。一九三三年に重修された大殿も、その内部が破壊され、現在、中央に祀られている三世仏も修復中であり、いずれ金色燐然たる本尊仏を仰ぐことができるにちがいない。高さ二七メートルの大殿の三十八本の柱は白色の花崗岩でできており、殿内の壁には一万二千二百十八体の仏像が飾られ、まさしく万仏殿と呼ばれるに値する見事なものである。

尼僧さんの案内で寺内を見たが、広大な寺城にある建物は、すべて復興の最中であつた。清の順治十二年（一六五五）に建てられたといわれる藏經閣も、荒れはてたままであつた。

この密印寺は百丈をついだ鴻山靈祐（七七一～八五三）

が住して、湖南における禪宗の一大拠点となつた。鴻山は弟子の仰山とともに鴻仰宗の開祖として名声を博したのである。大鴻山に住したので大鴻とも称した。唐の宰相であつた裴休が鴻山と交流があり、密印寺を建てたのである。石霜寺を開いた石霜慶諸（八〇七～八八八）も大鴻山の靈祐に参じたことがある。ある日、石霜が米寮で米をふるつていると、鴻山がやってきて「施主がくださつたお米を

散らかさないように」と言つた。石霜は「一粒も散らして

おりません」と答えると、鴻山が地面に落ちている一粒の米を拾いあげて、「お前さんは散らかしていないというが、この一粒はどこから来たのか」と言つた。石霜は一言もなかつた。鴻山は「この一粒の米をいいかげんにしてはいけないぞ。百十粒もこの一粒から生じるのだ」と言つたところ、石霜も逆に鴻山に問答をしかけたという。

寧鄉県は水田地帯である。三月の終りには、二毛作のために田が耕され、苗床には稻の穂がまかれている。田を耕すのに水牛を使う。この水牛は体は大きいがおとなしく、

農夫の指示する通りに黙々として田を耕す鋤を引いている。

まことにのどかな農村風景が現在でもいたるところに見られる。まだ耕作されていない田んばには、黄色い菜の花や、紫色のれんげ草がいっぱい咲いている。

鴻山郷は大鴻山の麓にあり、四方を山に囲まれた小さな盆地である。その盆地にも水田が拡がっている。唐の時代にも米を作つていたことであろう。鴻山が一粒の米も散らかしたり、落としたりしてはいけないと言つたことがよくわかる。米は農民の汗の結晶であるし、もつとも貴重な食

べもの一つであつた。

禪宗の教えには、米に関する問答がいくつかあることを思い出さざるを得ない。現在、飽食の時代といわれ、一粒の米を捨てるなど、何とも思わない世の中ではあるが、鴻山が説いた一粒の米の重みを深く知るべきである。ちなみにこの密印寺は一九八三年十月十日、湖南省人民政府の公布によって湖南省省級文物保護単位に指定されている。

三 常德市

鉄経幢

もとは徳山山麓の乾明寺故址（現在は住宅になっている。その遺址には石獅子があるのみ）にあつたものであるが、現在は常德市浜湖公園にある。一九七九年一月、現在地に移し、一九五九年一月二十四日、全国重點文物保護単位に指定された。

浜湖公園の橋を渡つたところの築山の上にある。一・四二メートルの高さの石幢座の上に置かれている。この幢座の辺縁には雲蓮紋の装飾がある。経幢は鉄鑄で円柱形をな

し、下部が大きく上部にゆくほど小さくなっている。幢の高さは四・三三五メートルある。底部の直径は〇・九メートル、重さは一五二〇・八公斤ある。

塔は二十層からなり、第八層と第十一層の上部には檐がある。下端には、半身の力土像、仏像、花紋、連珠紋、竜、虎などの図案がある。その中間には『般若波羅蜜多心経』と造幢人名とその官職が記されている。北宗代に建造されたものと推定されている。普通の経幢には石造物が多いが、この経幢は生鉄を用いて铸造された珍しいものである。

見るからに立派な経幢で重々しい感じがあり、このような経幢を造った当時の文化が偲ばれる。現在は浜湖公園の池畔にひつそりとたたずんでおり、訪れる人も少ない。

なお常德市の周辺には欽山寺址や梁山などの禅宗に関連の場所があるが、その近くまで行つたが遺址を確認することはできなかつた。

薬山寺

現代に生きるわれわれは大声で笑うことも少なくなつて

いる。大声を出したり、思いきり笑つたりすることを遠慮

するように習慣づけられてしまつた。それは、大都会ではあまりに近くに隣人が住んでいるため、大声を出すことがはばかれるからである。呵々大笑することも、嘯くことも忘れてしまつてゐるのが現代人である。

中国、湖南省の春は桃の花や菜の花の開花で始まる。湖北省の北部の常德市を出たバスは一路、洞庭湖の西北の平野を走つていくが、あたり一面、目につくのは菜の花畠である。小高い丘や、湖水を除くと、どこまで行つても真黄色なのである。日本にも菜の花はあるが、広漠たる大地に、どこまでもひろがる菜の花は桃源郷に行つたような思いにかられる。やがて常德市から津市市の境城に入ると、小高い丘の芍薬山が見える。この山の麓にあるのが、唐代の禅僧、薬山惟儼（七四四～八二七）が住した薬山寺である。

薬山寺の前には、津市市人民政府が一九八七年十一月二十一日に公布した「僧惟儼墓塔薬山寺風景區」と書かれた碑石が立つていた。寺は新しく復興された大都市の寺院に比べれば、あまりにもみすぼらしい建物であるが、長い歴史を秘め、風雪にたえてきたような寺であった。

山門を入れると正面に大雄殿が、左側に玉皇殿があつた。

大雄殿には中央に釈迦仏、左右に觀音と大勢至の二菩薩が祀られていた。田舎の寺らしく素朴な何の飾りもない殿宇であったが、村の人や常德市などからの参拝者があるらしく、「有求必應」と書かれた赤い布が張つてあつたりした。玉皇殿には、玉皇大帝や娘娘（ニヤンニヤン、子宝の神さま）や藥王などが祀られ、道教の廟であつた。仏教と道教とが混交しているばかりでなく、民間信仰とも融合した中国の典型的な廟であつた。

玉皇殿の前の庭には、古い碑石にまじつて「重建藥山古刹碑誌」と書かれた信者の寄付金の名簿をしるした碑があり、多くの信者の寄付によつて藥山寺が見事に復興されるものと思われる。

藥山寺を出て畠の中を歩き、左の山へ登ると、山の中腹に藥山禪師の墓塔がある。この墓塔は長嘯峰にあるので嘯峰塔と呼ばれている。墓は石を積みあげたものであるが、明の崇禎十三年（一六四〇）に書かれた碑刻がある。墓塔のあたりには、名の知らない草木が花を咲かせていた。

この墓塔がある長嘯峰は藥山禪師の逸話で有名である。

「藥山長嘯」と呼ばれる話は、和尚がこの山頂で雲を開けて月が見えたので、呵々大笑したが、その声が遠くまで聞こえたという逸話で、藥山が山頂で嘯いたので、この山を長嘯峰と呼ぶようになったのである。

この山の反対側にあるのが、その山容が臥している虎に似ているために虎山と呼ばれる。長嘯峰と虎山のあいだの畠や田は、すべて黄一色の菜の花畠である。この山で嘯けば、虎山にまでその声がとどくような気がする。現在の中では、都会住まいの人は、大声を出すことすら近所迷惑になるのでできないのが当たり前になつてゐる。長嘯峰のような山で、思いきり嘯き、腹をかかえて呵々大笑したものである。この長嘯峰に立つと、あまりに雄大な景観のために、われ知らず大声で叫びたくなる。この頂で月を見たならば、思わず月に向かつて叫びたくなるにちがいない。天地と自然の景観と人間が、まったく一枚になることができるからである。大宇宙と一体となつて呵々大笑したり、時には虎に負けないような大声で腹の中から嘯きたいものである。

四 石門県

湖南省石門県の県城から大河の澧水を渡し舟で渡つてから、田園風景を見ながら約十五キロ東南へ行くと、森に包まれた風景区に入る。ここが夾山寺国家森林公園である。大きな道路が造成中で間もなく完成するという。

夾山寺もまた復興の真っ最中であつた。すでに完成した大きな山門は天空に聳え立つてゐる。山門を入れると中心に亭のある放生池があり、その背後には鐘楼と鼓樓や天王殿がある。鐘楼は八角形であるが、それは、鐘の音が八方に伝わるようにといふ願いをこめて八角形に造られたのである。山門から大雄宝殿まではかなりの距離があり、昔は騎馬に乗つて山門から入つたといわれる。清代に建てられた大雄宝殿もまた修復中であった。法堂の前には清の康熙十四年（一七〇五）の「重興夾山靈泉禪院功德碑記」などがあつた。

大雄宝殿の後は法堂、大悲殿、藏經閣と続くがいずれも修復中であった。法堂の中には仏像が一体あるだけであった。大悲殿の前庭にある百日紅が花を咲かせてゐた。大悲

殿の右側に亭があり、その下から地下宮殿が見つかつたといわれる。

夾山寺は唐の咸通十一年（八七〇）に創建されたが、唐代には普慈寺、宋代には靈泉禪院と称された。夾山寺の夾山とは二つの山が対峙し、真ん中に一道が通つてゐるのでこの名がつけられた。唐の懿宗、宋の神宗、元の世祖が勅命をくだして再建したので、「三朝御修」の寺といわれる。唐の世、禪宗の夾山善会（八〇五—八二）がここに寺を開いて以来、夾山寺には禪宗の祖師が輩出、「楚南の名刹」と称され、澧水流域の仏教センターだつた。宋の高僧、圓悟克勤（一〇六三—一一三五）が張商英居士の招きに応じてこの夾山寺において説法すること十数年、雪竇重顕（九八〇—一〇五二）の『雪竇頌古』の中の本則と頌に対して、垂示、著語、および評唱を付したのが、「宗門第一書」といわれる『碧巖錄』なのである。

「猿は子を抱いて青嶂嶺に帰り、鳥は花を啄んで碧巖泉に落とす」（『夾山記』）という有名な句があるが、この碧巖の泉は、碧巖山の麓にある。泉は今も水量豊かで清冽な水が湧きだしてゐる。

また夾山寺は明の李自成の終焉の地として名高い。明末清初、農民蜂起の指導者であった李自成が奉天玉和尚となつてこの地に隠棲したといわれる。現在、夾山寺と道路を

へだてた反対側に、李自成の記念館や墓が建築中である。

墓から発掘された位碑、墓誌銘、舍利などは記念館に収蔵され展示されるという。この李自成記念館の山上に立つと、左手には夾山寺の背後にある青嶂嶺が望まれ、はるか彼方に碧巖の泉が望見できる、すばらしい景勝地であることがわかる。碧巖の泉に行く途中の、みかん畠の中に夾山の墓があつたといわれるがさだかでない。

夾山寺の周辺は茶で有名であり、日本の茶道の訪中団も訪れている。禪宗の『碧巖録』のふるさとであると同時に、茶道のふるさとでもあり、「茶禪一味」の源泉でもある。

この夾山寺森林公園には八十余種の観賞植物や二百四種の喬木や灌木があり、森をおおっているといわれる。一九九二年六月、湖南省はこの地に夾山寺森林公園を建設することに決定したのである。

復興中の夾山寺もまもなく完成し、また李自成記念館も落成し、この夾山森林公園を訪れる観光客も増えるにちが

いない。「茶禪一味」の風景区や、碧巖の泉を訪れて心の塵を洗いおとしたいものである。

五 醴陵県

中国、湖南省の春はどこへ行つても菜の花ばかりである。日本にも菜の花はあるが、そのスケールがちがう。遙か彼方の地平線まで、黄色い菜の花がつづいている。黄色い大地を行くようである。

湖南省の省都、長沙市から東へ進むと、やがて瀏陽県に入る。瀏陽県は、洞庭湖にそそぐ大河、湘江に合流する瀏陽河にそつて発達した県で、東は大園山や九嶺山脈をへだて江西省に接する県である。瀏陽県には大光山、宝藍山、道吾山など禪宗と関係の深い山々がある。

瀏陽市から南にとり醴陵県に向かう。あたりには低い山々が水田をへだてて視界に入る。長沙を出てから三時間余り、牛石、大瑤を経てさらに南下すると道路の右側に「石霜寺由此進」と書かれた石碑が立っていた。主道から右折して入ると道は狭く、舗装のしてない水たまりの多い山道である。そばを流れる渓流は岩石をうちながら奔流になつ

てはいる。あたりにはみかん畠があり、竹林があり、桃が花を咲かせており、田園風景が広がる。道路は溪流にそつて断崖をなすところもある。

やがて村はずれのよろず屋と水車小屋のあるところで車を降りる。あとはたんぽの道を歩かなければならぬ。道

ばたの小川や、村の家々や、丘のようななだらかな山々や竹林や林を見ていると、よき日本のかつての農村とまつたくかわることがない風景が展開する。子供たちの遊んでいる姿も日本の昔の農村と同じである。

やがて、はるか彼方に寺らしい建物が山すそこに見える。

近づくと大きな寺院であることがわかる。これが石霜寺であつた。山門には「古石霜寺」と書かれた大きな扁額がかげられている。山門の聯には「不二法門」と書かれ、門扉に「正法久住」の文字もみえる。案内の僧に従つて山門を入ると、石霜寺の全貌が見える。中央の大雄宝殿をはさんで韋陀殿と配殿が左右に配され、その背後には玉仙樓と方丈室、祖師堂などがあるが、大殿と韋陀殿以外は修復中であり、荒廃していた。しかし、倉庫のようになつてある祖師堂の入り口には、「往道吾法脈」とか、「開石霜宗風」と

書かれた聯があり、石霜の禪風を高くかかげようとする気魄が感じられる。

大殿の前には「石霜重勝禪寺重修大殿碑記」などの多くの重修碑が立てられており、この寺の歴史の重さを感じさせるものがある。

石霜寺は霜華山ともいわれた。山が険しく、水が激しく石にぶつかって霜を噴くからこのようにいわれた。ここにある石霜寺は、石霜慶諸（八〇七～八八）が湖南地方の禪宗的一大拠点とした寺である。石霜は大鴻山の靈祐（七七一～八五三）に参じ、ついで道吾円智（七六九～八三五）に師事した。その後、石霜山に行き、そこを終焉の地とした。石霜がいた頃、二十年間、石霜寺の堂中の老宿は、長坐して横臥することがなかつた。その姿がまるで棒杖のようであつたので石霜の枯木衆といつたという。のちに「石霜一生、枯木堂を置いて、枯木衆を安く。往往に常坐不臥なり。坐脱立亡の者極めて多し」（『徒容録』卷六）と言わられたのである。一生、枯れ木のように只管打坐し、坐つたまま、あるいは立つたまま没したのである。凄まじいばかりの修禪の氣魄が感じられる。あの石霜山の麓でそのよう

な秋霜烈日の烈しい修道生活がおくれたことを思うと、石霜山の溪流や森や竹林も、枯木衆の坐禅の気魄に感應しながら、その生氣を發散させていたにちがいない。山や谷も凝然として不動であつた。

春光うららかな、菜の花が咲いた田園風景からは、峻厳な宗風を思い出すこともなくなるが、かつての石霜山の風光に思いをはせながら帰途についたのである。

中国は広い。中国の文化遺蹟を訪ねることも容易ではない。仏教に關係する石窟、寺、塔、墓塔などを訪ねること

も容易ではない。あまりにも広大な大地に散在しているからである。ゆっくりと息ながく、少しずつ見に行くことが肝要である。

六 衡山県

南岳廟

南岳廟は湖南省衡山県の南岳鎮にある。衡山は中国の五

岳の一つであり、五岳の中ではもつとも南にあるので南岳といわれた。周囲八百里、七十二峰がある。もつとも高いのは祝融峰で海拔一、一九〇メートルある。漢の武帝の時

代には、安徽省の霍山を南岳と呼んでいたが、隋の文帝はそれを改めて衡山を南岳とした。唐の天宝五年（七四六）、玄宗は南岳を司天王に封じ、北宋の大中祥符四年（一〇一）一）、宋の真宗は南岳を聖帝に封じ、さらに徽宗は、南岳のために「天下南岳」「天下名山」と書いた題額を下賜した。その後、南岳では多くの寺廟が建てられ、神像や仏像が造られ、ついに「南岳寺廟四百八」といわれるようになつた。その後、南岳の名山は仏教の僧侶によつて占領されるようになつた。

南岳の寺廟の中では南岳廟が最も規模が大きく、南岳聖帝を祀つた大きな廟である。その創建は唐の開元十三年（七二五）であるが、現在の建築は清の光緒八年（一八八二）に再建されたものといわれる。総面積は九八、五〇〇平方メートルあり、周囲は赤い寺廟の壁をめぐらし、角楼を設けている。廟は北から南に向つて建てられ、中心線上には九つの建築が南から北に向つて順番に続いている。

南岳廟の入口には巨大な花崗岩造りの牌坊がある。その牌坊は櫺星門と呼ばれている。牌坊の中心の扁額には大きな字で「櫺星門」と書かれている。この牌坊の左右には正

方形の池があり、その周りは石の欄干で囲まれ、中央に石台がある。この牌坊は一九八六年に新しく修復されたものである。

櫺星門を過ぎると、奎星閣がある。この閣は戯台であり、その中央には木彫の龍が天井から垂れ下っている。台の上には八洞神仙図が描かれている。この奎星閣の両側には鐘亭と鼓亭がある。鐘亭の中には元代の重さ四・五屯の大きな鉄鐘がある。その音は二十里の外まで聞こえるという。正川門は三門からできている。中川門と東西川門である。東川門には玄徳宗門がありその門内には四觀一殿がある。西川門の西は六寺同門で、その中には六寺と忠靖王殿、関聖殿、觀音閣がある。

つぎの建物は御碑亭である。その中には重修南岳廟御碑

がある。これは清の康熙四十七年（一七〇八）に立てられたものである。

嘉応門は地方官が京師の御史官を迎えて、岳神を祭るためにしてられたもので、その建物の風格は宋代のおもむきを保つてゐるといわれる。

御書楼は歴代の下賜された文書や經典を保管するところ

で、現在、多くの碑刻が残つていて。

大殿は南岳聖帝の神像を祭り祭礼を行う場所である。清の光緒八年（一八八二）に再建され、民国十二年（一九二三）に木柱を石柱にかえたものである。その幅は七間、高さは二四メートルあり、二つの檐のついたりもや式の屋根があり、頂上は黄金の琉璃瓦で葺かれている。石柱が七十二本あるのは南岳七十二峰をあらわすものである。石柱の上部には如意の斗拱が彫られ、檐の下に雕刻があり、欄板には生き生きとした花鳥、走獸の石雕がある。大殿の中には南岳聖帝の塑像が祀られている。大殿の前には鉄製の鼎爐が二つある。一つは明代の桂王が造ったものであり、他の一つは清代の湖南巡撫使趙申喬が造つたものであるといわれる。

寝宮殿は南岳娘娘を祀る場所である。北宋大中祥符五年（一〇一二）に創建されたもので、殿の彩色は宋代のものすがたを保留していといわれる。芸術価値が高いものとして有名である。

もつとも北にある後門樓の、すぐ前の両側に轄神殿と注生殿がある。左側にある轄神殿には南岳轄神大帝および南

岳忠清王爺を祀つてゐる。右側にある注生殿は、人の死亡や病氣を定める神が祀られてゐるといふ。

後門樓は西側に五十三間の廊下がある大きな門樓で、この門を出れば南岳への登山口となつてゐる。あたりには土產物屋がいっぱい並んで観光客を集めている。

祝聖寺

祝聖寺は湖南省衡山県南岳鎮の東街にあり、南岳大廟から半里はなれており、南岳六大仏教叢林の一つである。伝説によると、この地は、大禹が舜帝を祀つた地であるために、かつては冷清宮と呼ばれた。唐の貞元年間（七八五—八〇四）、弥陀台という名称を下賜され、後に勝業寺と名を変えてゐる。

現在の寺院は清代に建てられた。康熙四十四年（一七〇

五年）、湖南巡撫使趙申喬が康熙帝の南方巡行を迎るために、旧址を改築して行宮としたが、その建築の規模は大きく、裝飾も美しかつた。その後、康熙帝はここへは来なかつたが、康熙五十三年（一七一四）夏、改めて寺院とし、祝聖寺と名づけた。

主な建物としては山門、天王殿、大雄宝殿、藥師殿、説法堂、羅漢堂、方丈室、觀岸室などがある。

羅漢堂は清の光緒六年（一八八〇）に建てられたが、堂内の左右の壁には、もとは青石の陽刻の五百羅漢の像がはめられていた。この五百羅漢像は寺僧心月が三年の心血をそいで造つたものであるが、これは常州天寧寺の五百羅漢像の拓本を見本として心をこめて雕刻してできたものである。各羅漢はその姿態が生き生きと、彫刻もすぐれており、その線も流暢であり、もとの羅漢像よりもすぐれたものといわれていた。文化大革命の十年の動乱によつて中は全部壊されてしまい、現存しているその拓本は、南岳廟の書画館に陳列されている。

ちなみに『南嶽志』には、祝聖寺について、つぎのように記述されている。

祝聖寺、在南嶽廟東南、一統志、即古勝業寺、唐建初名彌陀臺、大曆末賜號般舟道場、貞元間賜名彌陀寺、後改勝業寺、國朝康熙四十四年、巡撫趙申喬、修嶽廟、後改建爲行宮、擬請駕南巡因別建寺於沙坪、五十三年改行宮爲祝聖寺、賜藏經一部、以新建之勝業寺、併歸

祝聖、而舊勝業遂廢、

方広寺

方広寺は湖南省衡山県蓮花峰の下に位置する。このあたりには古木がおい繁り、泉水が湧き周囲の八つの山峰に囲まれているが、それはあたかも蓮花の花びらのようであり、蓮華の心にあたるのがこの方広寺である。昔し、「寺は蓮花の中にある、群峰は花葉を附せり」という古詩があつたという。

この寺は南朝の梁の天監二年（五〇三）に創建され、唐代に方広聖寿寺と改称され、さらに宋の初めには、方広崇禪寺という寺額を賜わり、明の崇禎年間（一六二八—一六四四）、浩空和尚が責任者となつて重建した。清の初、大火で焼失したが、その後修理された。寺内の主な建造物には正殿、祖師堂などがある。

寺の外の右側に一賢祠があるが、それは明の嘉靖十八年（一五三九）に、宋の朱熹と張栻祀るために建てられたものである。張栻はかつてここで百余首の詩を作つたといわれる。寺内の文物には宋代の銅鐘一個があるが、重さ一・

上封寺

上封寺は湖南省衡山県南岳の祝融峰の頂上の真下にあり、もとの名を光天觀とい。南岳鎮から一〇キロあり、南岳でもっとも古い古刹の一つであり、最高所に位置する寺である。

この寺は隋代には第二十二福地といわれ、道教の活動の場とみなされていた。『府志』によれば、隋の大業年間（六〇五—六一七）、煬帝（楊廣）が南方を巡視した時ここに来て、勅旨を下して道教の寺であつた光天觀を改めて、上封寺の名を賜つたという。今に至るまで千三百八十年余り

五屯のそれは、正殿の梁の間にかけられ、王夫之はこの鐘を飛来鐘と名づけた。寺の前にはそのほか「洗衲」「嘯台」「鸞響」などと彫られた石刻がある。方広寺のあるあたりは幽邃であり、附近には泉石、樹木、山峰などがあり、人々から「方広に游ばずんば、南岳の深を知らず」と言われていたという。「方広寺の深」とは南岳四絶の一つである。ちなみに南岳の四絶とは、祝融峰の高、藏經殿の秀、水簾洞の奇と、この方広寺の深のことである。

の歴史がある。寺は前後三つに分かれているが、皆な石の壁と鉄の瓦でできている。その後殿の斎堂には、「三摩隋入三摩地、十方常住十方僧」の字が柱に書かれている。現在、寺は招待所になっており、あちこちから来る遊覧客を接待している。寺の山門は石坊になつており、寺の側には「敲冰破凍、千古奇石」の八字の石刻がある。

上封寺は現在、香港の実業家が資金を出して立派に再建された。山門、天王殿、大雄宝殿などが一九九二年に完成した。鐘楼や鼓樓もできた立派な寺院となつていて、上封寺の左の上には祝融峰がある。寺から約一里許の絶頂に祝融殿がある。祝融殿の後には不語岩があり、その岩

上に、一つの石がある。その石は金の亀が頂上に向つてい上るようみえるので「金龜朝聖」と呼ばれている。

寺の右側の林の中に入ると、雲に包まれて古木の香りが

する雑木林があり、その中を石の欄干にそつて行くと望日台に出る。この台は元の世祖が立てたものといわれ、上にある石碑には、「望日出處」の四字が書かれている。この平らな台はかなりの広さがあるが、ここに立つて日出や日没を眺めると、甚だ壯觀であるといわれている。宋代の名

僧仏印が「日の出を觀る」という詩の中で、このあたりの雄大な風景を詩に詠んでいる。ちなみに『南嶽志』には、つぎの記事がある。

上封寺、在祝融峯、〔一統志〕舊爲光天觀、有司天霍王廟、隋大業中、始易爲寺、〔福地志〕寺爲第二十二光天壇福地、〔張栻集〕上封寺門外寒松、皆拳曲臃腫、模枝下垂、冰雪凝綴、如蒼龍白鳳然、〔方輿勝覽〕寺在祝融絕頂、早秋已涼、夏亦夾、衣木之高大者、不過七八尺、謂之矮松、上有雷池、題詠甚多、唐僧佛心居此、〔一統志〕國朝乾隆十六年奉旨祝融殿、雍正十三年奉旨查明、上封寺田、四百四十
八畝、一分零

廣濟寺

廣濟寺は、湖南省衡山県南岳の芙蓉峰の背後にあり、祝融峰と紫蓋峰の間にあるが、寺の創建年代は不明である。明の万暦二十三年（一五九五）、無碍和尚がここへ帰て、園馬和尚と青螺和尚の援助の下に、ここに草庵を築いた。清初には清源寺と称されたが、順治年間（一六四四～一六六一）に廣濟寺と改名された。後に又竜山和尚と智犁和

尚の募金援助によつて寺を修理し再建して現在の規模になつたという。

寺の周りは五十里あり、伝説によると禹王の城であつた。夏の禹王が治水の時にここに駐在したので、今に至るまで、なお、「禹王城」という二字の石刻の碑文がある。寺の中に今も一つの大銅鐘や、銅製の僧鍋や、雲板の時計などがある。これらは皆、清の順治年間に鋳造されたものといわれる。

高台寺

高台寺は、湖南省衡山県南岳の碧羅峰の小さな丘の上にある。創建年代は不明であるが、南宋の乾道三年（一一六七）秋、朱熹と張栻が南岳に遊びに来た時、すでにこの寺はあつたといわれる。しかし、何時破壊されたか分からぬが、現存の寺院は明の嘉靖二十五年（一五四六）に再建されたものであり、高僧の楚石が住したという。寺の山門の聯には、「松蔭匝地、佛法參天」と書かれている。宋の張鈞が遊びに来た時、「萬仞孤高處、烟雲縹渺間」という詩文を残した。そのほか先人は「山高、石奇、泉清、樹古」

處、

南台寺

南台寺は衡山の擲鉢峰の下、福嚴寺の南約一キロにある。この寺は南朝の梁の天監年間（五〇二～五一九）に、海印禪師がこの山を愛して創建したといわれている。唐の天宝二年（七四三）、禪宗の七祖、青原行思の弟子石頭希遷がこの地にやって来て、あたりの景色が美しく、環境が静かでまさしく仏地であると認めて、ついにここに道場を開き、南台寺と名づけたといわれる。希遷は、ここで『草庵歌』『參同契』などの著作を残した。

などの字を用いて高台寺を形容する特質とした。寺の周囲には怪石が林立し、高いところから下を見ると、岩上に多くの題刻が書かれ、その中には「秀山群峰、撐起南天」、「重見天石」、「雍容大雅」などの字がある。特に大きい字は「觀海樓」の三字であり、人々の注目を集めたものである。この場所は、正確には「觀雲海」の理想の場所である。ちなみに『南嶽志』には、つぎのように記されている。

高臺寺、在祝融峯下、卽觀音巖、明羅洪先訪楚石上人

南宋の乾道元年（一一六五）、無碍和尚がここへ来て礼

仏し寺を再建した。元明の時代には、僧徒は南岳廟の西廊にそれぞれ自室を建てて分舍し、「老南台」とか「新南台」と呼称したので、寺は次第に衰えていった。

現存の南台寺は、淡雲和尚が、清の光緒二十八年から三十二年（一九〇二～一九〇六）にかけて重修したものである。この頃、石頭希遷の四十二代の法孫であると自称する日本の水野梅曉がこの地に来て祖庭の遺芳を尋ねた。彼はこの立派な祖庭を見て、淡雲和尚の許しを得て、『大藏經』

を寄贈しようと言つた。淡雲和尚は「寺が完成すれば仏法

は天に至る」と答え、その申し出を受けたのである。

四年後、水野梅曉は『大藏經』全部を自ら南台寺に送り、日中両国仏教の親善友好に貢献した。現在の日本の曹洞宗では南台寺を祖庭の一つとみなしている。この事は、「日本僧贈藏經記」という碑刻の中に記されている。

現在の殿宇には大雄宝殿、藏經樓、仏堂、閻帝廟、禪堂、祖堂、雲水堂、宿房、山門、廟牆などがあり、そのほとんど

がよく保存されている。寺内にある文物としては、梁代の石刻や、宋代の石曼卿が書いた釈迦仏などの石刻、及び

見相塔（希遷和尚の墓塔）などがある。

石頭希遷（七〇〇～七九〇）は唐代の禪僧であり、俗姓は陳、端州高要（広東省肇慶市）の人である。禪宗の六祖慧能に参じ、唐の玄宗の開元十六年（七二一八）、羅浮山に行つて受戒した。その後禪宗の七祖である青原行思に師事した。天宝二年（七四三）、南岳に行つて道場を開き南台寺に住した。没すると無際大師の号が謚された。弟子には道悟、惟儼など二十一人があつたといわれる。

福嚴寺

福嚴寺は南岳衡山擲鉢峰の下にある。南朝の陳の光大元年（五六七）、天台宗第三祖の慧思禪師によつて創建された。慧思がここで『般若經』を講じたので、初めは般若寺と名づけられ、また般若台ともいわれた。唐の玄宗の開元元年（七一三）、禪宗七祖の懷讓禪師がこの寺に道場を開き禪を弘め、六祖慧能の頓悟の法門を宣揚したので「天下法院」とも称された。

宋の太平興國年間（九七六～九八三）に福嚴寺と改名された。清代に破壊された後、ふたたび清の同治九年（一八

七〇）に再建され、南岳六大叢林の第一となつた。

寺は山にそつて建てられている。現在の主要な建築物には、山門、過殿、岳神殿、大雄宝殿、藏經閣、祖殿、方丈室、法堂、雲水堂、蓮池堂、左斎堂、右禪堂などがあり、それらは同治九年（一八七〇）に再建されたものである。磚（れんが）と木の構造のいりもや造りの建物は、昔の香りと色彩が残つており、素朴で優雅な趣をただよわせている。

山門は大きくはないが、硬山式の建物で、門の扁額には「天下法院」の四字が書かれている。右の聯には「六朝古刹」、左の聯には「七祖道場」と書かれている。その書体は流暢で力があり、名筆家の書といわれている。

山門を通るとすぐに過殿（知客寮）があり、その前の石柱に聯がある。それには、

福嚴爲南山第一古刹
般若是老祖不二法門

と刻されている。

岳神殿は硬山式の黄色の琉璃瓦をふいた建築であり、この中には南北朝時代に铸造されたという銅製の南岳神像が

置かれている。仏教の寺院の中に岳神殿が設けられているのは、あたかも韓国の寺院の中に山神閣が設けられているようなものである。

大雄宝殿もまた硬山式の黄色の琉璃瓦をふいた殿堂であり、堂々たるものである。殿内には銅製の大きな釈迦牟尼佛、文殊菩薩、普賢菩薩の像が祀られ、左右には十八羅漢がある。

寺の背後の高いところに拜経台（高明台）がある。巨岩の上に「極高明」の三字が鮮やかに見える。これは唐の德宗の時、宰相であった李泌が手書したものといわれている。

岩壁の東部に石刻がある。真中には大きく「佛」の字があり、左側には「高無見頂相」、右側には「明不借他光」と刻されている。左右の石刻の文字の「高」と「明」から「高明台」と名づけられた。それは仏相の極高、仏光の極明をあらわしており、まさしく「極高明」の三字の意味となつてゐる。この下方にも一組の石刻があり、上方には「拜経台」、左側には「留拜經石」、右側には「垂止觀篇」とある。「垂止觀篇」というのは、慧思禪師が止觀を垂示したからであろう。大岩石の側に一つの石があり、「慧思一生岩」と名づ

けられている。

寺の門前に大きな銀杏の古木がある。周囲約五メートルの巨木は一、四〇〇余年も経てているといわれる大銀杏である。『南嶽志』によると、この銀杏は慧思禪師より受戒したといわれる。ちなみに『南嶽志』には、つぎのように記されている。

福嚴寺、在擲鉢峯下、舊名般若寺、亦名般若臺、陳光
大元年、慧思禪師建、唐僧審承良雅皆居此、有唐太宗
御書、梵經五十卷、今無存、〔黃庭堅南行錄〕福嚴寺、
在南嶽、依巖架空爲之、蓋思公道場、有三生塔、有嶽
帝銅像、又唐楚雲上人、刺血寫妙法蓮華經一部、藏三
生塔下、至宋猶存、國朝乾隆五年
賜藏經全部、雍正十三年、二百二十六函四分四釐、查明福嚴寺田

れるに至った。現在は立派に整備された道を登って行くと三生塔に着く。

三生塔の中央の墓塔には、上部の扁額に「朝東顯跡、我遇縁有」と刻され、その下に「三生勝境」と横書きにされた文字があり、中央には「南嶽慧思圓慧妙勝禪師塔」と刻されていた。左側の「燈眞」と書かれた下には、「南岳佛教協會重刊、佛歷二五三〇・公元一九八六年丙寅仲冬月穀旦」と示され、右側には「世耀」と横書きされた扁額の下に、「靈骨萬年歲壽獄」とあつた。

なお衡山には禅宗関係の遺址として磨鏡台や「禅宗七祖懷讓大慧禪師塔」と書かれた南岳懷讓の墓塔などがあるが、それらについてはかつて訪問した時書いたので今は省略しておきたい。

三生塔

寺の前方の山の中に慧思禪師の墓塔がある。それは「三生塔」と呼ばれている。慧思は三回生まれ三回死んだから三生塔といわれる。この慧思の墓塔は一九八六年に塔が造られ、一九八九年に道路と墓地が整備されて一般に解放さ